堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

近代博物学拓いた宮の出会い　水谷豊文・シーボルト・伊藤圭介

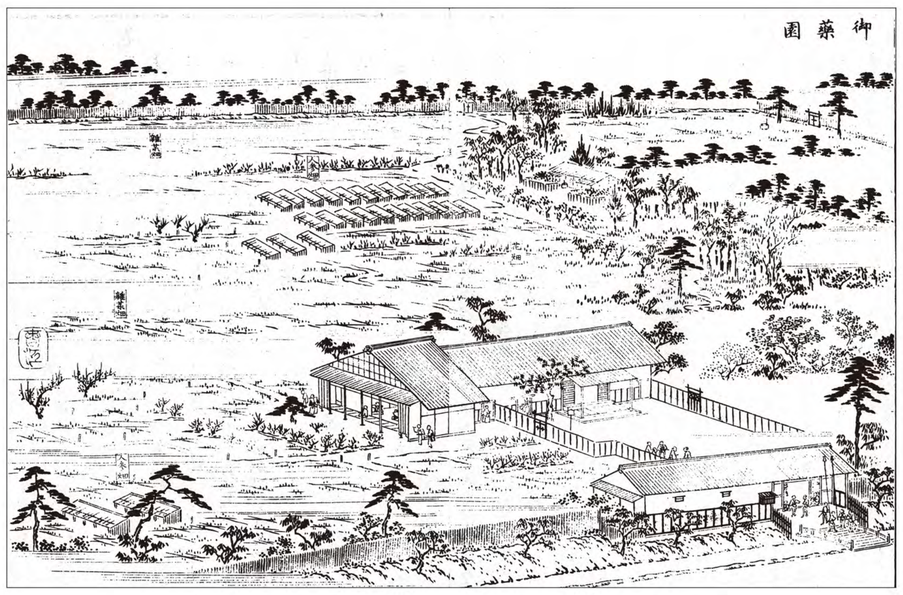
江戸時代の医学は漢方が中心で、薬の原料となる植物・動物・鉱物を研究する本草学が盛んだった。ヨーロッパでは、さまざまな物を科学的に調査研究する博物学が発達し、シーボルトが熱田で名古屋の本草学者と出会うことがきっかけになり、この地に博物学が育ち日本の科学発展に大きく寄与することとなった。

水谷豊文　シーボルトも驚く名古屋育ちの博物学者

水谷豊文は安永８年（1779）名古屋御園町で尾張藩士の本草学者・水谷覚夢の子として誕生。家禄200石の尾張藩士で、享和２年（1802）に御馬廻組で出仕し、その後大御番組・御広敷組に替っている。

仕事のかたわら趣味で京都の本草学者の小野蘭山に学び、併せて名古屋最初の蘭方医である野村立栄から蘭学を学んだ。その学識が認められたのか、文化２年（1805）に藩主下屋敷の一画に設けられ朝鮮人参などの栽培を行っていた薬園御用を命じられている。

豊文は山に入って珍しい植物を採取して、自宅で栽培し研究を重ねていた。好事家仲間と嘗百社（しょうひゃくしゃ）をつくり、集めた薬草などを展示し意見交換する本草会を開いて研究を深めている。



下屋敷の一画（建中寺の南西）にあった薬園
（小治田之真清水）

文政９年（1826）にシーボルトが江戸参府に向かう時、豊文は大河内存真やその弟の伊藤圭介などと共に熱田で待ち受けて面会した。シーボルトは、豊文がスウェーデンの博物学者・植物学者リンネの名称による植物分類（雄しべと雌しべの性質で綱・目を分ける雌雄蕊（しゆうずい）分類法で、今日の体系的学名を構築した）を正確に理解していることに驚いたという。名古屋で近代博物学の基礎を築いた豊文は、天保４年（1833）に亡くなっている。

シーボルト（長崎県立図書館蔵）

シーボルト　近代科学を日本に広めたドイツ人

シーボルトは1796年に大学教授（医学）の子として生まれたドイツ人である。大学では医学・植物学・動物学などを学び、卒業後に一時開業医となったのち、文政６年（1823）８月に長崎のオランダ商館付き医師として日本に来た。翌年には長崎郊外の鳴滝に塾を開き、日本各地から集まってきた人々に医学を始めとする西洋の学問を伝授している。

文政９年にはオランダ商館長の江戸参府に随行し、各地の門弟と交流すると共に日本の博物の調査・収集を行った。熱田では水谷豊文や伊藤圭介などと会い植物解剖学を教えたが、豊文たちの持参した標本から得たものも多く「この立派な人たちと親交を結んだおかげで、日本の植物群に対する私の知識は著しく増大した」と書いている。

文政11年に任期を終えて帰国することになったが、荷物の中に禁制の日本地図などが見つかり、国外追放処分となった。いわゆるシーボルト事件である。

帰国後は日本の研究を深め、日本が開国した安政５年（1858）には短期間だが再来日し、1866年にミュンヘンで亡くなった。

伊藤圭介　日本最初の理学博士

伊藤圭介は享和３年（1803）に、町医者である西山玄道の子として名古屋呉服町に生まれた。水谷豊文の弟子となって本草学を学び、その後、京都で蘭学を勉強している。

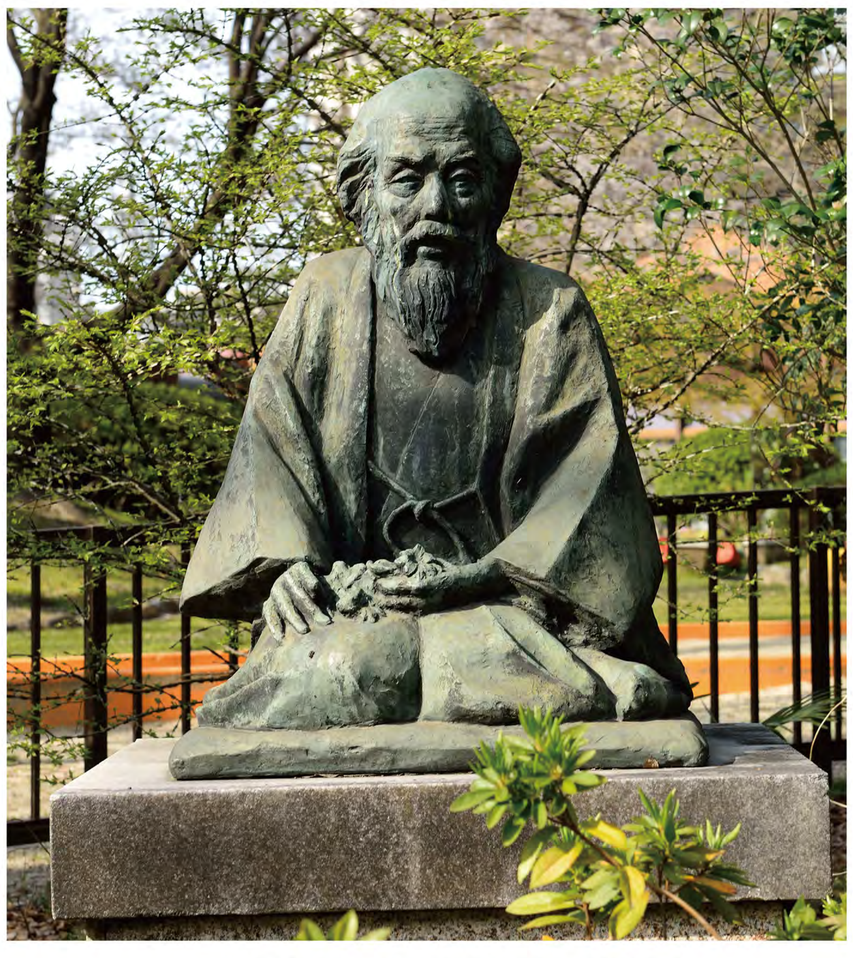
シーボルトに出会った時に長崎遊学を勧められ、翌文政10年に長崎へ行った。半年間にわたりシーボルトから直接指導を受けて最新の知識を身につけ、帰郷すると蘭方医として開業している。

蘭学の知識を活用して植物や種痘の本を著述すると共に、嘉永３年（1850）には自宅で種痘の施術を行い、５年に藩が種痘所を設けるとその取締を命じられている。また豊文が亡くなった後は嘗百社の中心メンバーとなり、博物会や薬品会の開催に努めた。

天保12年になると、上級藩士で西洋式砲術を研究している上田仲敏が開設した洋学所で蘭学を教えるようになった。嘉永６年にペリーが浦賀に来航し開国を迫ると、幕府も諸藩も急遽海防を強化し始めた。尾張藩も西洋式砲術を採用することになり、安政６年（1859）に圭介は藩の寄合所医師に登用され、洋学所の惣裁心得になっている。

文久元年（1861）には幕府に召されて蛮書取調所物産局の教員となったが、２年後に辞任して帰名した。

明治３年（1870）に政府から大学出仕を命ぜられ、10年に東大理学部員外教授、14年に教授。21年には日本最初の理学博士の称号が授与された。明治34年に99歳の長寿を全うして亡くなった。


鶴舞中央図書館前に建つ伊藤圭介像